

おおさか
KEY
ワード
第38回

よみがえる

「夫婦善哉」

文学の街・大阪ふたたび



写真：
左 輿爽と大阪の街を行くオダサク
右「それでも私は行く」
昭和23(1948)年
大阪文庫発行
本誌表紙の大阪新聞社発行
(昭和22年)のものと同表紙が
違うのが面白い。

大阪の小説家は多い。ノーベル賞作家の川端康成、「直木賞」の直木三十五をはじめ、梶井基次郎や野間宏、今東光、国民的作家である司馬遼太郎、山崎豊子、田辺聖子をはじめ、小田実や開高健もエネルギーギッシュだった。小松左京、筒井康隆はSFから豊穡な文学に達し、さらに黒岩重吾、藤本義一も懐かしく、現在も多くの作家が純文学から大衆文学まで、幅広いジャンルで活躍している。とりわけ大阪人から親しまれているのが、今年、生誕100年となる通称「オダサク」こと織田作之助(1913～1947)である。

織田は旧大阪市南区(現天王寺区)生玉前町に生まれ、旧制高津中学校(現府立高津高等学校)から第三高等学校(現京都大学)に入学する。演劇に興味を抱くが、フランスの文豪スタンダールに刺激され、小説家を目指した。後には郷土の大先輩である井原西鶴にも触発される。昭和13(1938)年に処女作「雨」を発表し、翌年に文芸雑誌『海風』掲載の「俗臭」が、室生犀星の推薦で芥川賞を最後まで争った。昭和15(1940)年には、代表作として知られる「夫婦善哉」が改造社の第一回文芸推薦作品となり、本格的に文壇デビューした。

終戦後、「六白金星」「アド・バルーン」「世相」「競馬」を発表して一躍流行作家となる。坂口安吾、太宰治、石川淳らと“無頼派”と称され、読売新聞連載「土曜夫人」が佳境に入ろうとしていながらも、咯血し、昭和22(1947)年1月10日に急逝した。墓所は楞嚴寺(大阪府天王寺区)にある。

34歳の若さで長逝した織田作之助だが、大阪人には深く愛され、上町台地の口縄坂には、昭和19(1944)年の『新潮』に発表された「木の都」の文学碑があるし、「夫婦善哉」の舞台である法善寺横丁には「行き暮れてここが思案の善哉かな」の句碑がある。昭和59(1984)年には、大阪文学振興会により、作之助の名前を冠した文学賞「織田作之助賞」も制定され、

現在もつづいている。「夫婦善哉」に登場する千日前の「自由軒」に、

「トラは死んで皮をのこす／

織田作死んでカレーライスをのこす」

と書かれた額縁入りの写真が飾られているのはミナミのちょっとした名物だろう。

生誕100年の今年は、NHKでも、8月24日スタートの土曜ドラマで「夫婦善哉」が放送される(毎週土曜、連続4回)。東映太秦映画村に法善寺横丁のオープンセットを作るほどの力の入れようで、近年、発見された九州・別府が舞台の「夫婦善哉」続編も脚本に加えるなど、制作者の意欲が伝わってくる。「夫婦善哉」のドラマ化と言えば、昭和30(1955)年公開、豊田四郎監督の東映映画作品が有名で、主人公の柳吉を森繁久彌、蝶子を淡島千景が演じた。今回のテレビドラマでは、柳吉が森山未来、蝶子が尾野真千子であり、平成の時代の新しい「夫婦善哉」が、どのように仕上がっているか楽しみである。

さらに大阪歴史博物館では、織田文学の熱烈なファンクラブであるオダサク倶楽部を中心に、特別企画展「生誕100年記念 織田作之助と大大阪」が開催される(9月25日(水)～10月18日(金)、毎週火曜日休館)。

死の直前に書いた「可能性の文学」は、志賀直哉に代表される「私小説」を厳しく批判して話題になった文芸批評だった。小説の神様と呼ばれた志賀を批判する意気やよし。いかにも庶民的で権威に批判的な大阪人らしい批判精神である。

昭和21(1946)年に「京都日日新聞」に連載された「それでも私は行く」は、舞台も京都であり、サスペンス仕立てとなる内容から出来映えには賛否があるが、なにごとか決意を秘めて前のめりに進むようなタイトルそのものが、織田の未完の人生を象徴するようで、私は好きである。